

＜功 績＞

福林徹氏は、永年にわたり、専門分野のスポーツ医学（整形外科）において、豊富な臨床実績を積むとともに、基礎的な臨床的研究に取り組み、治療実践と研究の両面で多大な功績を残してきた。

同氏の功績の中でも、特に、膝前十字靭帯二重再建術における半腱様筋腱の再生の研究は、世界のスポーツ整形外科医から注目を浴びた研究となった。

また、スポーツ医学における予防に関する研究にも力を入れてきた。サッカー、バスケットボール、ラグビーフットボールなどのコンタクトスポーツでの外傷は、従来その多くの外傷が相手との接触により生じるものと考えられ、ある意味では不可抗力的要素が強いと考えられてきた。しかしながら同氏は、コンタクトスポーツで頻度の高い外傷としてあげられる大腿部肉離れ、膝靭帯損傷等の外傷は、その大部分が非接触性のプレーで起こっている点や女性競技者が男性競技者に比べ発症率が高いといった点などに着目し、前十字靭帯をはじめとする非接触型靭帯損傷の受傷メカニズムの解析と予防法の開発に着手し、研究にいち早く取り組んだ。

このように同氏がこれまで取り組まれた膝前十字靭帯などに着目した研究及び治療実践における功績は、平成 19 年、スポーツ外科分野において世界的権威のある国際関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（ISAKOS）の「John Joyce award」を受賞されるなど、世界的な評価を受けており、我が国スポーツ界においては、「膝の福林」と称されるほど研究者及び競技者から絶大の信頼を得ている。

この他、平成 19 年度から日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会委員長として日本体育協会の各種研究事業を牽引してきた。また、自らも研究プロジェクト班の班長として各種研究事業に参画し、多岐にわたる活動に携わってきた。

代表的な研究プロジェクトとしては、「日本におけるスポーツ外傷サーベイランスシステムの構築」があげられる。本プロジェクトでは、スポーツ外傷・障害を分析し、原因を確定することで、予防につなげる疫学的研究の重要性を説き、日本で行われる主要競技会におけるスポーツ外傷調査を規格化、世界基準と比較検討できるシステムを構築した。その後、同氏が、日本スポーツ振興センター、スポーツ安全協会に協力を呼びかけ、学校管理下・管理外での全国的なスポーツ外傷（スポーツ災害）の統計データを分析し、わが国におけるスポーツ外傷の実態を明らかにした。

また、「子どもの発達段階に応じた体力向上プログラムの開発事業」では、子どもの体力低下、あるいは運動をする子どもとしない子どもとの二極化現象が問題視される今日において、子どもが発育・発達段階に応じて、身につけておくことが望ましい動きを習得するための運動プログラムとして、「みんなで遊んで元気アップ！アクティブ・チャイルド・プログラム」を発行した。ガイドブックと DVD から成る本プログラムは、映像による実践事例や、動きの評価法などが分かりやすく紹介・解説されており、地域のスポーツ指導者や小学校教員等にとって有益な教材として活用され、現場の指導者か

らも好評を得ている。

また、日本体育協会の諸事業に対しても、専門分野であるスポーツ医学の見地から積極的に携わってきた。国民体育大会関係事業では、国民体育大会における都道府県選手団へのスポーツドクターの帯同義務付けを実現するとともに、その役割や活動の充実を目的とした指針の取りまとめや、日本アンチ・ドーピング機構（JADA）など関係諸機関等との連携のもと、平成 15 年の第 58 回国民体育大会（静岡県）から大会期間中のドーピング検査導入を実現させた。また、スポーツ指導者育成事業では、公認スポーツドクター養成事業及び公認アスレティックトレーナー養成事業に尽力してきた。

この他、日本臨床スポーツ医学会理事長及び日本関節鏡・膝スポーツ整形外科学会理事、ISAKOS Orthopaedic Sports Medicine Committee member をはじめとした国内外における学会役職を務め、各種学会活動に精力的に取り組み、我が国におけるスポーツ整形外科学的研究の発展に貢献した。また、公益財団法人日本サッカー協会では、スポーツ医科学委員会委員及び同委員会委員長を務め、Jリーグのチームドクター及びトレーナー制度の確立や、平成 7 年からサッカー日本代表のチームドクターとして合宿及び大会時に帯同し、我が国サッカー界の悲願であったワールドカップ出場に向け、選手を陰ながら支え、平成 10 年に開催されたサッカーワールドカップフランス大会への出場という快挙に貢献した。

また、研究者としての功績もさることながら、教育者としての指導力も特筆しておかなければならない。同氏の研究室を巣立った卒業生の多くは優れた研究者、教育者となり、現在の我が国の体育・スポーツ科学の第一線で活躍していることは広く知られるところである。同氏の進める研究の多くは、このような優れた研究者集団の堅固なチームワークによって成し遂げられた成果に他ならず、まさに教育者としての業績の表れとして高く評価されるものである。